

庭全体の説明(築山・洲浜・出島石組と池中立石)

毛越寺庭園

毛越寺の庭園は、平安時代の造園作法にのっとり作られました。この造園作法は、広大な自然の景色を、庭のなかに再現することを重視するものです。毛越寺庭園には、海を表現した「大泉が池」と呼ばれる大きな池があり、この池には、砂浜、険しい海岸線、山から海に水を注ぐ川など、自然景観を表現した重要な特徴があります。

南西の岸の大きな岩“築山”は、日本の険しい海岸を模し、池の東端の“洲浜”と呼ばれる突き出た場所は湖の流れや流れに伴って変化する沿岸を表しています。

さらに“出島石組と呼ばれる石組みが、池の東南にあります。その側、池の中にも池中立石”2.5メートルの石があり、荒磯のような印象を与えます。

池と庭園は、12世紀の状態に復元されました。現在、参拝者が浄土庭園の荘厳さを目の当たりにすることができるのは、発掘調査のおかげです。かつて日本の寺院や貴族の邸宅には、このような庭園があったと言われていますが、12世紀の姿のまま残っている浄土庭園は、この庭園を含めほんの少数です。